

## リスク回避緩和の円安、持続と反動にらむ 感染2波、日米国債入札、米中対立、EU基金など焦点

今週の為替相場はリスク回避緩和による円安・外貨高の持続性と、反動的な円高・外貨安をにらんだ展開が想定される。週間予想はドル/円が106.60-108.90円、ユーロ/円は120.20-123.20円。前週は米国での感染2波警戒などでリスク回避の円高が優勢となる場面があったが、米国の雇用統計改善や感染打撃は特需となる米ITハイテク株の底堅さなどで過度な円高も抑制されている。今週は米国など各国での感染2波動向や日米での国債増発下での国債入札、米中対立、EU復興基金協議などが焦点になる。

### ドル/円の日足テクニカル、13日前後に転換点

今週の為替相場で注目されるのは、米国などでの新型コロナ感染「第2波」の行方だ。前週には感染が急増している米国、ブラジル、インドだけでなく、日本、欧州、豪州などで世界的に感染が再増加となってきた。

しかも6日には「感染力が最大で6倍高い変種コロナウイルスが登場したとの分析もある」（韓国・朝鮮日報）、「中国北部の内モンゴル自治区で、腺ペストの疑いがある患者1人が報告された」（ブルームバーグ）といった不穏な報道が見られている。引き続き各国で感染増加や経済規制の再強化、景気再悪化といった悪いニュースが出てくると、日米などの株安やリスク回避の円高・外貨安が意識されやすい。

一方で「7-9月は新型コロナのワクチンや治療薬に関する最新データが続々と公表される見込み」（2日ブルームバーグ）とされている。1日には米製薬大手ファイザーが独医薬ベンチャーと共同開発中のワクチンについて、「初期の臨床試験で良好なデータが得られた」と発表。リスク選好相場を支援する場面が見られている。今週以降も治療薬やワクチン開発のほか、感染者減少、経済規制抑制といった前向きなニュースが出てくると、株高とリスク選好の円安・外貨高という一喜一憂が想定される。

ドル/円の日足テクニカルでは、一目均衡表チャートで7月13日前後にかけて転換点を示す「雲のネジレ」が観測されている。7月6日時点で雲ネジレは107.92-108.19円前後に位置しているが、上下動を経ながらも雲ネジレの上抜け方向を目指す機運が高まると、ドルの上値余地が拡大していく。まずは基準線107.96円前後や、7月2-9日かけて雲上限が位置している108.85円方向が当座の上値ターゲットとして視界に入る。

反対に雲ネジレの下抜けトライが強まると、改めてドルの下値リスクが意識される。下値メドとしては転換線107.28円前後や週足の基準線106.71円前後のほか、直近ドル安値である6月23日の106.07円前後や5月7日の105.99円前後の方向を試しに行く可能性も無視できない。

先行き不透明感は強いものの、現状段階で過度なドル安を制御するのが米国債金利の下げ渋りだ（債券価格は上げ渋り）。米国の指標改善やFRBの当座の緩和一服、米政府による大型財政出動を受けた国債増発などもあり、金利低下の圧力自体は鈍化してきた。

米10年債金利は6日の時間外取引で0.67-0.69%前後となっているが、日足テクニカルでは55日移動平均線0.6822%の上抜けと、方向性的上向き化の定着攻防に直面している。1月2日以降の金利低下トレンドが一服となっており、過去実績として米10年債金利の下げ止まりと緩やかな下限切り上がりが意識されやすい。日足の一目均衡表では転換線0.6734%と雲下限0.6720%の「同時上抜け」という、1月14日以来の基調転換を巡る攻防にもなっている。

ドル/円についても、現状からのドル安余地の狭まりや、緩やかなドルの下限切り上がりが注目されそうだ。

今週の米国債市場では、国債増発下で国債入札が相次ぐ。需給悪化懸念のほか、急激な金利低下（債券価格は急騰）の過熱警戒感などにより、入札が低調となれば短期的な米債金利上昇とドル高の可能性を秘めている。反対に根強い押し目買い需要が確認されると、改めて米債金利の低下とドル安の圧力が意識されやすい。今週は日本でも国債発行が予定されており、円相場も同様の市場反応が注視されよう。その他の注目ポイントは以下の通り。

#### <米大統領選に向けた米中対立の行方>

中国の全人代常務委員会は6月30日、香港の治安維持法案である国家安全法案を全会一致で可決した。それに対して米トランプ政権は香港を対象にした輸出規制を相次いで発表するなど、対中制裁を強化させている。11月の米大統領選に向けてトランプ大統領の支持率が低下するか、再選対策としての「中国叩き」はリスク回避の円高材料として注視されそうだ。

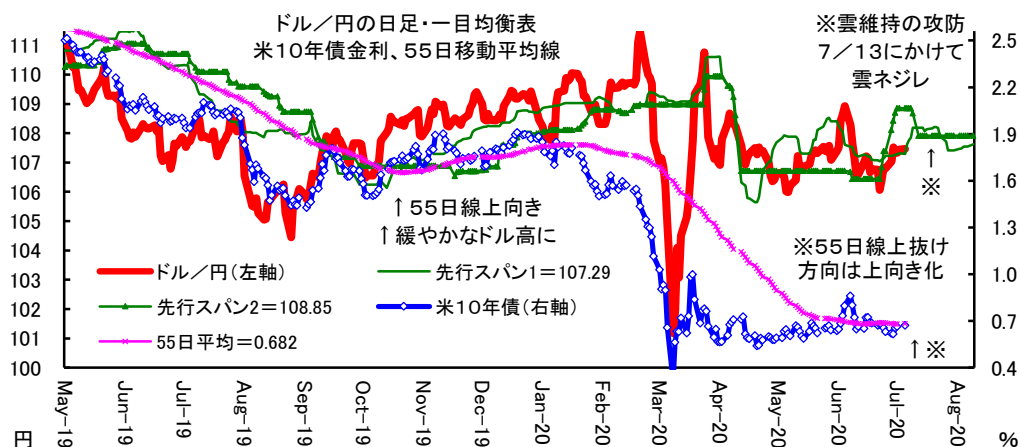
米ウォールストリート・ジャーナル紙は6月30日、「日本企業のファーウェイ取引、目を光らせる米政府」と報じた。この報道を受けて韓国の朝鮮日報は、「米国が、韓国や日本、ドイツなどの同盟国に対し、中国ファーウェイ（華為技術）の通信設備の輸入を禁止するだけでなく、ファーウェイへの部品輸出も停止するよう圧力をかける可能性がある」といった警戒感を示している。

#### <EU基金協議、期待がユーロとリスク選好下支え>

今週以降の為替相場では、17-18日のEU首脳会議がユーロやリスク選好による円安の支援材料として注目される。7500億ユーロ（約90兆円）規模に上る復興基金を協議するもので、すでに一定の織り込みは進展してきたほか、難航リスクは残るものの、17-18日までは進展「期待」が維持される。

今週は9日にユーロ圏財務相会合、10日にEU財務相理事会が予定されている。基金に関して細部の調整が進展すると、ユーロ高や円安を支援。反対に意見対立の残存が示されると、短期的なユーロ安や円高の波乱余地を秘めている。

為替相場のユーロ/円では、1年スパンのトレンドラインを示す12カ月移動平均線119.54円前後の上抜けと、方向角度的上向き化を巡る重要攻防に直面してきた（6日アジア市場時点、3日終値は120.86円前後）。これから上下動を経ながらも上向き化が定着できると、2018年7月以来の現象となる。同時期からのユーロ安・円高トレンドの一段落と、緩やかなユーロ高・円安への基調転換が注目され



やすい。

過去に12カ月平均の下向き化からの上向き転換は、2017年5月以降、2012年12月以降、2004年8月以降、2000年1月以降——などで明確化された。いずれも上向き化が維持されている間は、最短ケースでも1年近いユーロ高トレンドが持続形成されている。

ドル/円はユーロ高・ドル安とユーロ高・円安との綱引きになる。過去実績でユーロ高・円安はリスク選好の局面で発生しやすいほか、ユーロ/円が主導する形でクロス円全般での円安・外貨高を通じて、ドル/円では円安や円高抑制によるレンジ横這いのパターンが観測されてきた。

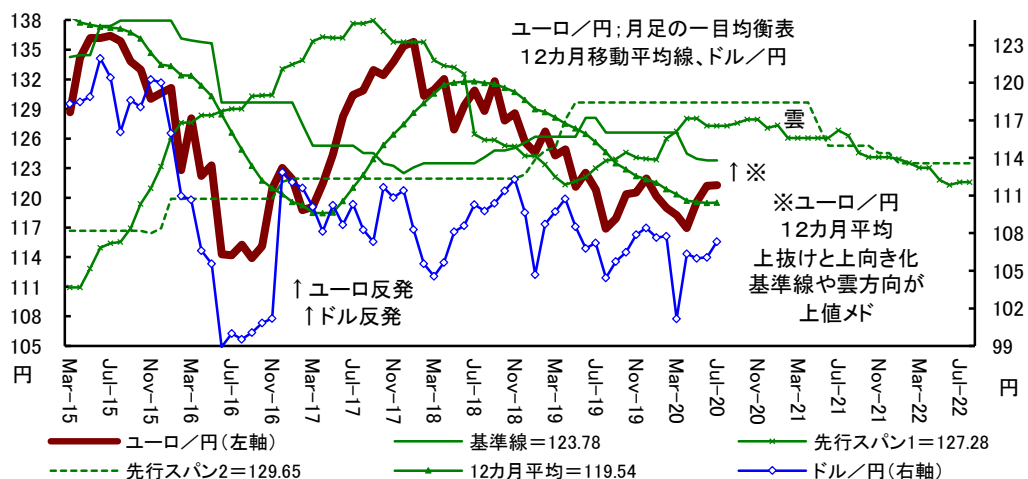
#### <豪ドル/円やNZドル/円、月足の雲下限など視界>

為替相場の中長期トレンド判断で参考になるのが月足テクニカルだ。豪ドル/円は6日のアジア市場時点レートで、18カ月移動平均線73.90円前後の上抜け定着攻防に直面してきた。これから上下動を経ながらも上抜け突破できると、2018年2月以来の現象となる。改めて同時期からの豪ドル安トレンドの一段落が後押しされ、先行き上値メドとして月足・一目均衡表チャートの雲下限（6日時点て83.14円、来年2月にかけて79.16円方向に切り下がり）などが視界に入る可能性を秘めている。

NZドル/円は15カ月移動平均線69.07円前後の上抜け定着攻防となってきた。先行き上下動を経ながらも、上抜け定着できると先行き上値メドとして月足・一目均衡表チャートの雲下限（6日時点て77.26円、来年2月にかけて75.48円方向に切り下がり）などが意識されそうだ。

豪ドルとNZドルについては週明け6日に、中国の国営メディア・証券時報が「コロナ感染後に健全な強気相場を促すことは、経済にとってこれまで以上に重要になっている」という論説を掲載したことが支援材料になった。

NZについては同国のアーダーン首相が5日、9月19日の総選挙に向け、「自らが率いる労働党の選挙活動を本格化させた」（ロイター）。首相は中小企業向け融資制度の期限延長とインフラおよび環境関連の雇用の拡大を約束したとされ、選挙対策の本格化が9月に向けてのNZドルの支援材料となるか否かが焦点になってきた。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。